

研究拠点形成事業
平成 28 年度 実施報告書
(平成 25～27 年度採択課題用)
B.アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	聖路加国際大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学
インドネシア拠点機関：	国立イスラム大学

2. 研究交流課題名

(和文)：アジア・アフリカ圏の妊産婦・新生児死亡率減少のための助産人材育成モデルの開発
(交流分野： 母性看護・助産学)

(英文)：Development of midwifery personnel training model for maternal and newborn mortality reduction in Asia and Africa

(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://university.luke.ac.jp/about/project/aamrc/about.html>

3. 採用期間

平成 27 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日

(2 年度目)

4. 実施体制**日本側実施組織**

拠点機関：聖路加国際大学

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：学長・福井次矢

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：子どもと家族の看護領域・教授・堀内成子

協力機関：毛利助産院、埼玉医科大学

事務組織：聖路加国際大学事務局

相手国側実施組織（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名：タンザニア

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：

(英文) School of Nursing・Lecturer・Sebalda LESHABARI

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association、Muhimbili National Hospital
(和文) タンザニア助産協会、ムヒンビリ国立病院

(2) 国名：インドネシア

拠点機関：(英文) Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah
(和文) 国立イスラム大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：

(英文) School of Nursing・Lecturer・Yenita AGUS

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

1. アジア・アフリカの現場で希求されている助産人材の育成モデルの開発

本研究交流事業の前身では、3年間(平成23-25年度)のアジア・アフリカ学術基盤形成事業を通じ、タンザニア国内初の助産学修士課程の設立に成功した。設立前の教育セミナーを通じ、現地の助産師が、自らの知識・技術向上に対し高い意欲を持っているにもかかわらず、学びの場が限られていることが判明した(Shimpuku et al., 2012; Shimpuku et al., 2013)。高い妊産婦死亡率、新生児死亡率減少の鍵を握る助産師・看護師の育成のための教育をタンザニアでの研究を基盤として、インドネシアに発展・展開し、自国で持続的にその育成が可能なモデルを開発することが、本研究交流の目標である。

2. 国際保健人材の強化のエビデンスを示す助産研究拠点の形成

外務省は、2013年5月に国際保健を日本外交の重要課題と位置づけ、国際保健分野において日本人の果たす役割の拡大を戦略目標に掲げ、人材育成をその具体的施策の一つとしている。大学院において助産の教育研究を行う我が国の特徴は、臨床・教育・研究が連携・循環している点にある。本研究交流は、3年間で基盤を形成した戦略をタンザニアからインドネシアに発展させるものであり、資格を得た後に生涯に渡って専門職教育という長期的視点を持った助産教育研究を日本型モデルとして世界に発信する拠点を形成する。

3. 母子保健関連目標の達成に貢献する助産職のキャリア開発と評価

2015年に期限を迎えるミレニアム開発目標(MDGs)のうち、母子保健関連目標は達成の遅れが指摘されている。特に妊産婦死亡、新生児死亡を減少させるには、周産期医療へのアクセスと質の改善が急務である。タンザニアでは約半数が未だ出産時に専門の技能を持つ分娩助産者(Skilled Birth Attendant : SBA)にアクセスできておらず、インドネシアでは、出産時のSBAへのアクセスにおける地域間や集団格差が問題である。その要因として医療の質の問題が指摘されている。医療者は膨大な数の患者対応に追われており、妊産婦は医療機関で満足にケアが提供されず、信頼関係が築けないことから、次のアクセスを控えることが両国で報告されている(Agus, 2012; McMahon, 2014)。病院には出産中に重篤な状況に陥ってから搬送される場合が多く、多くの母児が遷延分娩、産後出血、新生児

蘇生の遅延など、日本であれば救命の可能性のある状況で死に至っている。その要因として医療者不足、教育者不足ばかりが指摘されているが、助産職のキャリア開発に関する研究はほとんど行われておらず、国や地域毎に役割が異なる助産師の実践能力をグローバルに強化するしくみづくりが不可欠である。本研究交流では、母子保健分野の主な担い手である助産職への教育評価を、最終的に医療の受け手である女性と子どもの成果指標である妊産婦死亡、新生児死亡の減少として研究で示すことを目指すものである。

5-2. 平成28年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

本年度も、タンザニアとはすでに構築している関係性の継続、拡大に向け、研究と教育を継続する。R-1は前年度の結果を共同発表し、R-2の調査実施に向け、継続的なコミュニケーションを続ける。S-1は三国間の協働が必要になるため、それぞれのコーディネーター間で、より密に連絡を取り合う。

インドネシアとの研究交流は、前年度に調整を開始した研究協力体制を、具体的な調査(R-3)とセミナー(S-3)の実施により強化する。

<学術的観点>

タンザニアでは、前年度に実施したR-1の効果の国際学会での発表と論文投稿を行い、その有用性と効果を国際的に公表する。R-2では施設分娩中の軽蔑と虐待に関する実態調査を実施することで、今後の教育介入につながるデータを収集する。

インドネシアでは、調整を進めてきたR-3の臨床助産師の学習ニーズを調査する。そこで抽出されたニーズに沿って、教育セミナーを行う。

これら進行中の活動を、7月にスコットランドで開催されるGlobal Network of WHO Collaborating Centre for Nursing and Midwifery 2年毎の大会のシンポジウムで報告することで、本事業の国際的な認知度の向上と、以後の展開に向けたフィードバックを受けることを目指す。更には、S-1として世界保健機関と三国の共同セミナーの開催により、国際的に認知された新生児ケアのエビデンスに則った研究教育活動の展開を行う。

<若手研究者育成>

研究者交流では、日本側拠点の大学院生をタンザニアに同行させ、現地での研究教育活動に参画させる。R-1, R-2でも日本側拠点の大学院生の参加を促し、国際的な研究活動の一助を担う機会を提供する。また前年度からタンザニア拠点機関より博士後期課程に留学している研究者には、本格的な研究活動ができるよう、本人の研究計画を練り上げながら、本事業への参画の機会を与える。また、タンザニアでは本学と協働して作り上げた助産学修士課程が進行し、9名の第二学年の助産師が修士課程研究中であるため、コンサルテーションを継続し、また、20名の第一学年の助産師への教育活動を行う。

インドネシア拠点機関には、本学の博士後期課程を修了した教員が3名いるため、彼らに本事業への参画と研究の機会を与える。

＜その他（社会貢献や独自の目的等）＞

本事業による社会貢献、また独自の目的として、先述の通り臨床への還元を掲げているが、タンザニアでは今年度の R-2 の実施により、分娩時のケアに関する実態を調査することで、今後エビデンスに基づいたケア、人を尊重し、女性と家族の意思決定を促進する人間的な出産を提供できるように、助産ケアの改善に必要な教育への示唆を得る。

インドネシアでは、R-3により臨床教育のニーズ調査を実施し、ニーズに沿った教育セミナーを実施する。

そして、両国と世界保健機関との協働で実施する「Early Essential Newborn Care（早期必須新生児ケア）」（S-1）の開催に向け、世界保健機関との連絡を続け、必要な教材の日本語訳を続ける。エビデンスに基づいた臨床ケアをタンザニア、インドネシアに拡大していく活動を通し、臨床ケアの改善を通じた社会への貢献を進めていく。

6. 平成28年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

6-1 研究協力体制の構築状況

計画通りタンザニアでは、R-1の結果を2つの国際学会、1つの学内学会で発表した。R-2はタンザニア側コーディネーターとの協働により、データ収集と分析を終了した。3カ国間の協同と世界保健機関(WHO)の共催で実施した S-1 も計画通りに実施され、3カ国が顔を合わせて、WHOの最新のエビデンスに基づいた新生児ケアをともに学びあう機会となった。

インドネシアとの交流においても、R-3の実施による助産師の学習ニーズ調査と、学習ニーズに基づいた分娩後の早期母子接触(early skin-to-skin care)教育プログラムを実施するため、平成29年1月に3名を3日間(1/13-15)、2名をその後のWHOインドネシアカンントリーオフィスとの話し合いも含め5日間(1/13-17)、インドネシアに派遣した。助産師の学習ニーズは質的研究、教育プログラムの成果についてはプログラム前後の知識の変化の分析を行い、その結果について論文執筆中である。来年度の助産人財育成強化におけるさらなる貢献のために、インドネシア側コーディネーターが研究生として来日し、日本人メンバーとともに入念に計画を実施中で、インドネシア側とも共同体制の強化が図られた。(平成29年2月21日より4月13日まで来日。インドネシア側コーディネーター来日経費は、インドネシアの助成金による。)

6-2 学術面の成果

タンザニアと実施した R-1 の成果は、ケニアで開催されたアフリカ看護研究者が集う East Central and Southern Africa College of Nursing (ECSACON)で発表し、開発した教育介入について関心が集まった。特に教育教材として使用した、出産準備についての物語のブックレットについて、アフリカ諸国、欧米からの参加者から関心を寄せられた。また、プログラム評価部分は、アジアの若手研究者の集う East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)にてポスター発表した。教育プログラムの参加者から高い評価を得ていること

で、そのプログラムの内容に関心が集まった。国際学術誌に投稿した論文はレビューアーの選定に時間がかかり、現在も査読中である。

R-2 では、施設分娩中の軽蔑と虐待に関する実態調査を実施し、分析によって助産師の労働環境やシステムと関連した虐待の実施が明らかになった。タンザニアで助産師が自身のケアを患者虐待と関連させて回答した研究は先進的であり、ケアの改善への示唆に富んだ結果が得られた。本事業 R-2 の先行研究であるタンザニアでの Humanized Childbirth セミナーの介入研究は、論文の出版に至った。また、助産師の軽蔑と虐待に関する質的調査に関する研究は現在国際学術誌にて査読中である。軽蔑と虐待の研究を基盤にしたケアリングの視点から The 3rd International Society of caring and Peace Conference (Kurume, Japan) “Caring and Practice”のシンポジストとして招聘講演を行った。

Global Network of WHO Collaborating Centre for Nursing and Midwifery では、国際助産師連盟会長や WHO の助産政策決定に関わる研究者たちとのシンポジウムにおいて、キーノートの一人として本事業のタンザニアとの協働について、招待講演を行った。

S-1 として実施した WHO と三カ国共同セミナーは、エビデンスに則った新生児ケアを学び合い、成果を学会発表した。論文は学会誌への投稿準備中である。

【学術論文】

Horiuchi, S., Shimpuku, Y., Iida, M., Nagamatsu, Y., Eto, H., Leshabari, S. (2016). Humanized childbirth awareness-raising program among Tanzanian midwives and nurses: A mixed-methods study. *International Journal of Africa Nursing Sciences*, 5, 9-16.

【招待講演】

Horiuchi, S. “Let’s Minimalize the Power Difference in Patients-Clinician Relationships, Symposium Caring and Practice, The 3rd International Society of Caring and Peace Conference (Kurume, Japan), March 25-26, 2017.

Shimpuku, Y. “Why midwives make a difference to women and newborn health” as a keynote speaker, 11th Biennial Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centre for Nursing and Midwifery, Glasgow (Scotland), July 27-29, 2016.

【学会発表】

Oka, M., Horiuchi, S., Shimpuku, Y., Madeni, F. and Leshabari, S. “Evaluation of an Educational Program for Nurses About Birth Preparedness and Complication Readiness in Rural Tanzania” the 12th scientific conference of the East, Central and Southern Africa College of Nursing (ECSACON) (Kenya) September 7-9, 2016.

岡美雪, 新福洋子, 長松康子, 堀内成子. “Early Essential Newborn Care の改善: イン

ドネシア・タンザニア助産師のファシリテーターの育成”第11回聖ルカ・アカデミア(東京). 2017年1月28日.

Oka, M., Horiuchi, S., Shimpuku, Y., and Shishido, E. and Madeni, F. “Evaluation of Nurses’ Perceptions of the Educational Program on Antenatal Counseling Program in Rural Tanzania” the 20th conference of the east Asian forum of Nursing Scholars (EAFONS) (Hong Kong), March 9-10, 2017.

6-3 若手研究者育成

研究者交流では、日本側拠点研究者のタンザニア渡航時に大学院生13名が同行した。現地での研究教育活動に参加し、タンザニア側研究者へプレゼンテーションを行った(7月、10日間派遣)。タンザニア側若手研究者も大学院生グループで計画していた若年妊産婦予防プロジェクト案をプレゼンテーションし、お互いから学びあう機会となった。

R-1, R-2にも計画通り大学院生が参加し、R-1から27年度修士論文執筆の大学院生は博士課程に進学し、R-2から28年度は別の大学院生が博士論文を執筆するに至った。タンザニア側拠点機関より博士課程後期に留学している若手研究者は、本事業の目的に即した若年妊産婦予防ケアのプログラムを開発し、研究計画書を書き上げ、口頭試験に合格した。

タンザニア側拠点期間に本学と共同で設立した助産学修士課程からは、1期生9名が修了した。それぞれにタンザニアの助産ケアを改善するような研究課題に取り組んだ。タンザニアにおける助産リーダー育成は進行していると言える。

インドネシア側は、日本側、インドネシア側両国の若手研究者がR-3, S-3に参加した。事業全体を通し、若手研究者の積極的な育成と活用が実行できている。

【聖路加国際大学紀要】

Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Nagamatsu, Y. (2017). Reciprocal learning effects between the JICA Collaborative Course and the International Cooperation Seminar in Tanzania. St. Luke's International University Bulletin, 3, 58-62.

【博士論文】

下田 佳奈 (2017). Prevalence of and Factors Relating to Nurses’ and Midwives’ Self-Reported Disrespect and Abuse of Women during Facility-Based Childbirth in Tanzania (タンザニア施設内分娩における看護・助産師から女性への軽蔑と虐待の実態およびその要因の探索). 聖路加国際大学博士論文.

【学会発表】

新福洋子, 堀内成子. “国際的な母子保健人材育成を行うタンザニア短期・長期派遣教育プログラムの実践報告.” 第57回日本母性衛生学会学術集会. 2016年10月14-15日.

新福洋子, 堀内成子, 中島薫, "国際的な母子保健の改善: タンザニア長期・短期派遣教育による人材育成" 第11回聖ルカ・アカデミア(東京), 2017年1月28日.

6-4 その他(社会貢献や独自の目的等)

本事業による社会貢献、また独自の目的として、臨床への還元を掲げている。タンザニアでは、R-2により、人を尊重し、女性と家族の意思決定を促進する人間的な出産を提供できるように、分娩時の軽蔑と虐待について、助産師自身が行っている軽蔑と虐待を回答した。結果から、ケアの放棄など出産アウトカムに重大な影響をもたらす行為があることが判明した。背景要因として助産師の労働環境の見直し、現任教育の充実、助産師としての自律性や誇りの育成、職場の人間関係の調整等が必要であるという示唆が得られた。この結果は論文で発表するとともに、保健省への政策提言につなげていく。

インドネシアで実施した R-3 では、知識がないままに現場で実施しているカンガルーケアについての学習ニーズがあったことから、講義と模型を用いた演習から成る早期母子接触プログラムを S-3 として実施した。プログラム後に助産師の知識得点は上昇し、実践練習を交えたセミナーは助産師たちの知識とスキルの向上に効果的であると評価を得た。

世界保健機関(WHO)との共同で Early Essential Newborn Care (早期必須新生児ケア)のセミナーを S-1 として開催するに際し、日本語訳した動画はインターネット上で公開され、医療者から一般の母親まで幅広い対象が視聴している。開催した S-1 は、WHO 西太平洋事務局より、好事例として HP 上で公開された。本事業に関与するすべての活動は、タイムリーにニュースレターとして世界に配信され多くの人々が手にすることができるように周知を行っている。

総じて、タンザニアとインドネシアの助産ケア改善に向けた実践的な研究教育拠点としての機能が、臨床ケアの改善という社会貢献に直接的に繋がっていると言える。

<オンライン公開成果物>

Asia Africa Midwifery Research Center. (2016, May 16). Japanese version of First Embrace [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=CJHmbzn6a9Q>

World Health Organization. (2016). *Midwives learning from each other across countries and cultures*. Second Regional Forum of WHO Collaborating Centres in the Western Pacific, 28-29 November 2016. Retrieved from http://www.wpro.who.int/whocc_forum/highlights/news/20161116-midwives-learning-across-c/en

Shimpuku, Y., Oka, M., & Horiuchi, S. (2016-2017). Asia Africa Midwifery Research Center Newsletter 14-17. Retrieved from <http://university.luke.ac.jp/about/project/aamrc/newsletter.html>

6-5 今後の課題・問題点

タンザニア側は前アジア・アフリカ学術基盤形成事業から協働期間も長く、若手研究者も育成しているため、複数の協働研究が進み、倫理審査に係る時間などの難しさはあるが、期間を意識した準備を行うことで対応している。

インドネシアでは28年度に初めてプログラムを開催したが、参加者より、知識やスキル修得だけでなく、上司や病院の理解がないと実施できない現状が示された。今後、助産ケアにおける管理職への介入を検討中である。プログラムにおいては、インドネシアの助産師は外国語の理解が難しいため、セミナーの実施にインドネシア語と日本語の通訳を入れたが、シミュレーション型セミナーで質問を投げかけながら進む内容を同時通訳者が訳しきれない場面が多く、参加者の反応を日本側研究者が理解できないことがあった。今後は通訳を複数にする、もしくは英語でコミュニケーションのとれる助産師を対象とするなどの対応を考えている。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- | | |
|-----------------------------------|----|
| (1) 平成28年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 | 3本 |
| うち、相手国参加研究者との共著 | 1本 |
| (2) 平成28年度の国際会議における発表 | 4件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表 | 2件 |
| (3) 平成28年度の国内学会・シンポジウム等における発表 | 3件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表 | 0件 |
| (※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。) | |
| (※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。) | |

7. 平成28年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成27年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア農村部の助産師・看護師を対象とした、出産準備カウンセリング教育プログラムによる知識と技術の向上</p> <p>(英文) Improve Health Worker's Knowledge and Skills by Education Program of job aid Supported Counseling for Birth Preparedness and Complication Readiness (BP/CR) in Rural Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・看護学部・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, College of Nursing, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Dean</p>				
28年度の研究交流活動	<p>27年度に実施、評価したプログラムの効果を、ケニアで開催されたアフリカ圏の看護学会で口頭発表し、また香港で開催されたアジア圏の看護学会にてポスターセッションに参加した。現在、国際学術雑誌に投稿し査読中である。また、今後の方向性を話し合い、実施した看護師・助産師を対象とした妊婦健診での出産準備教育カウンセリングの技術の向上に関する教育プログラムは、助産師のカウンセリング技術の知識と技術の向上に寄与したこと、この先助産師のカウンセリングの効果を高めるためには、妊婦健診の場で、妊婦が自身の健康状況や出産準備に対する状況を語ることをサポートする必要性が示された。したがって、29年度には、タンザニア農村部の妊婦健診での妊婦の会話の実態調査と、妊婦グループによる会話促進プログラムの開発と評価を実施することとした。メールによるやりとりを定期的に行っており、派遣等は実施しなかった。</p>				
28年度の研究交流活動から得られた成果	<p>①出産準備カウンセリング教育プログラムの効果が公開され、国内外の研究者にプログラムを共有し、特に教育教材として使用した、出産準備についての物語のブックレットについて、アフリカ諸国、欧米からの参加者から関心を寄せられた。</p> <p>②国際学会での共同発表2件や共著論文の執筆に携わった日本側、タンザニア側両国の若手研究者の国際学会での発表や論文執筆の機会を得、若手研究者の国際共同研究への参加の機会となった。</p> <p>③今後のプログラムの展開の方向性が確認でき、上記のような研究の発展に対する両国間の合意が形成された。</p>				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成27年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニアにおける施設分娩時の助産師から女性への軽蔑と虐待の実態調査</p> <p>(英文) Survey on Disrespect and Abuse during Childbirth in Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・看護学部・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, College of Nursing, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Dean</p>				
28年度の研究交流活動	<p>調査のための研究計画書と質問紙を作成し、研究倫理審査の許可を得た。その後、3つの州で国立病院、州立病院、県立病院、ヘルスセンター、ディスペンサリーといった規模の異なる医療施設に渡り、施設分娩における助産師から女性への軽蔑と虐待の実態を探るため、助産師を対象にした作成した質問紙を用いたデータ収集、分析を行った。その結果、先行研究の女性側の報告と同様、一定の割合で女性へ軽蔑的なケアや虐待が実施されているという結果が見受けられ、また助産師の労働環境・システムがそれらの行動に関連していることが明らかとなった。メールによるやりとりを定期的に行った。(1名がタンザニアに渡航したが、渡航費は他の助成金による)</p>				
28年度の研究交流活動から得られた成果	<p>① タンザニア施設勤務助産師が一定の割合で女性へ軽蔑的なケアや虐待が実施されているという結果が見受けられ、職業倫理や産婦に対する専門職としての真摯な姿勢が求められること、それができるといような労働環境・システムを構築していくことが重要であると示唆された。</p> <p>② 今後労働環境やシステムについては保健省と話し合うことが示唆され、教育については、職業倫理を高め専門家教育を進めていく必要性が考察された。</p> <p>③ 調査に携わるタンザニア側、日本側両国の若手研究者の研究参加機会となり、1名が本研究から博士課程を修了した。</p>				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成27年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) インドネシアの現任教育における助産師の学習ニーズ調査 (英文) Learning needs survey on midwifery in-service training in Indonesia				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・看護学部・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, College of Nursing, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Yenita AGUS, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah, School of Nursing, Lecturer				
28年度の研究交流活動	28年度の調査で、学習ニーズとして、出産直後の早期Skin-to-skin careに関する学習ニーズが挙げられた。そのため28年度S-3として、その教育セミナーを実施した。その実施の様子と教育介入前後での評価研究も実施し、モデルを用いたシミュレーション教育の好効果が得られた。1名をインドネシアへ6月に4日間派遣した。その後はメールによるやりとりを定期的に行い、結果を反映したセミナーの開催に、S-3で再び渡航した。				
28年度の研究交流活動から得られた成果	① 調査を通じてインドネシアの臨床の助産師たちが認識している学習ニーズとして、早期母子接触が挙げられた。 ② S-3として早期母子接触に関するプログラムの実施につながった。 ③ 日本側研究者とインドネシア研究者が共同して研究計画を立ち上げ、セミナーを実施し、プログラム前後の評価研究を実施することができた。 ④ シミュレーション教育の好効果が得られたことから、インドネシアの助産師・看護師にそうした実践型教育が応用可能であることが示された。				

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「世界保健機関/三国共同セミナー早期必須新生児ケア」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “WHO and multi-country joint seminar on Early Essential Newborn Care”
開催期間	平成28年10月24日～平成28年10月26日(3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加国際大学 (英文) Japan, Tokyo, St. Luke's International University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・看護学部・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, College of Nursing, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)	
		A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	9/33	
	B.	11	
タンザニア 〈人/人日〉	A.	0/0	
	B.	2	
インドネシア 〈人/人日〉	A.	2/24	
	B.	0	
フィリピン 〈人/人日〉	A.	2/9	
	B.	0	
シエラレオネ 〈人/人日〉	A.	0/0	
	B.	1	
合計 〈人/人日〉	A.	13/66	
	B.	13	

- A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>改善しつつある乳幼児死亡の中で、世界的に新生児死亡は改善が遅れている。そうした世界共通の課題に対し、世界保健機関西太平洋事務局が実施している早期必須新生児ケアのトレーニングを、タンザニア、インドネシアの臨床助産師／助産教育者に展開する。今回参加者を、エビデンスに基づいた新生児ケアをそれぞれの国で展開するファシリテーターとして育成することを目的とする。日本側若手研究者にも参加させることで、2国での展開の補助や、それぞれの研究活動への参画の機会とする。</p>	
<p>セミナーの成果</p>	<p>① タンザニア人助産師2名、インドネシア人助産師・看護師各1名、シエラレオネじん保健師1名を含めたWHO早期必須新生児ケアのガイドラインに基づいたファシリテーターの育成が達成された。</p> <p>② WHOの担当官との相談から、29年度のタンザニア、インドネシアにおける新生児ケアトレーニングの実施について話し合い、実施に向けた計画を立てた。</p> <p>③ 日本側若手研究者7名が、世界国際機関との共同セミナーへの参画の機会を持つことができ、外国人医療者と共に学ぶことの難しさと喜び、WHO担当官から国際的な臨床ケアの基準を学んだ。それぞれが将来の自身のグローバルヘルスへの貢献を考えたことができた。</p> <p>④ 日本語版「WHO First Embrace」の作成過程において、世界的に新生児死亡率が低い日本においても、母子の早期接触の実施は施設や医療者の考え方によるところが大きく、エビデンスに基づいたケアを促進するためにも、日本に対してもケアの受け手である母親たちへ、自らの受けるケアを医療者と話し合えるよう広報活動が求められることが話しあった。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>聖路加国際大学参加研究員、事務局 世界保健機関、西太平洋事務局</p>	
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費、謝金、備品・消耗品購入費、その他経費</p>
	<p>タンザニア側</p>	<p>内容 タンザニア国内旅費</p>
	<p>インドネシア側</p>	<p>内容 インドネシア国内旅費</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「未来の助産師によるタンザニアでの経験報告 2016」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Report of future midwives about their experience in Tanzania 2016“
開催期間	平成28年 11月17日 (1日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加国際大学
	(英文) Japan, Tokyo, St. Luke’s International University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・看護学部・教授
	(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke’s International University, College of Nursing, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	13 / 13	
〈人／人日〉	18	
〈人／人日〉		
〈人／人日〉		
合計 〈人／人日〉	13 / 13	
	18	

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	平成28年7月に研究者交流として日本側参加研究者のタンザニア渡航を予定している。今年度はタンザニアに渡航中の大学院生や、現地の助産師との交流から学びを深める。その成果を広く日本の助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民に報告することを目的とする。	
セミナーの成果	① 7月に渡航した助産学生と国際看護の大学院生がその交流事業からの学びを発表した。30名の参加者があり、タンザニアでボランティア経験のある助産師や本事業に関心のある看護学生が参加し、「現地にあるものを活用する、ということが大切な気がするが、現地でそういった例を見ることができたか」という質問があり、物資が不足し、人材も不足した場所でのケアの工夫について話し合った。 ② 発表者と参加者がそれぞれのタンザニアでの体験を共有し、今後どのような研究が求められるか、これまでに実施した研究の課題について話し合われた。一般参加者からは、「このような機会はめったにないため、セミナーからたくさんのことを学ぶことができた。またこのような機会があればぜひ参加したい」という声が聞かれた。 ③ セミナーの実施により、大学院生を含めた参加研究者の発表の機会となり、研究者間の相互理解と信頼関係が高まった。	
セミナーの運営組織	聖路加国際大学参加研究員、事務局	
開催経費 分担内容	日本側	内容 その他経費

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「インドネシアの母子保健改善のための教育セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Educational seminar for improvement of maternal child health in Indonesia“
開催期間	平成29年 1月14日 ～ 平成29年1月14日 (1日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) インドネシア、ジャカルタ、国立イスラム大学 (英文) Indonesia, Jakarta, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・看護学部・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, College of Nursing, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Yenita AGUS, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah, Lecturer

参加者数

派遣先□ 派遣元□	セミナー開催国 (インドネシア)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	5/ 19
	B.	0
インドネシア 〈人/人日〉	A.	2/ 2
	B.	20
タンザニア 〈人/人日〉	A.	0/ 0
	B.	
合計 〈人/人日〉	A.	7/ 21
	B.	20

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	インドネシア助産師の教育ニーズに関する実態調査に基づき、教育セミナーを開催する。結果として、エビデンスに基づいたケア、人を尊重し、女性と家族の意思決定を促進する人間的な出産を両国に展開し、最終的にケアを受ける女性と家族に裨益することを旨とする。	
セミナーの成果	<p>① インドネシアの臨床助産師・産科看護師が、出産直後の母子接触に関し、モデルを用いたシミュレーション教育を受けた。S-1で受けた EENC のコンテンツの一部を用い、WHO が最新のエビデンスを展開することができた。</p> <p>② インドネシアの教員が、日本人研究者の実施した助産師・産科看護師の臨床能力を高めるシミュレーション教育を体験し、インドネシアの医療者からの好評を受け、以後の教育方法について考える機会となった。</p> <p>③ 共同セミナーの実施により、両国間の相互理解と信頼関係が高まった。</p>	
セミナーの運営組織	聖路加国際大学参加研究員、事務局	
開催経費 分担内容	日本側	内容 外国旅費、備品・消耗品購入費、その他経費
	インドネシア側	内容 会場提供

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数	派遣研究者			訪問先・内容		派遣先
		氏名・所属・職名		氏名・所属・職名	内容	
27	日間	新福 洋子 聖路加国際大学・助教	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション、研究成果話し合い、来年度計画	タンザニア
10	日間	阿部 由美子 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	石川 智美 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	磯 怜央菜 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	堀井 桃 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	小川 真世 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	河野 明子 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	柏原 由梨恵 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	鈴木 菜香 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	永吉 智恵美 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	福富 理佳 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	山本 真美 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	鈴木 大地 聖路加国際大学・博士課程前期	LESHABARI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視察、プレゼンテーション	タンザニア

平成25～27年度採択課題

10	日間	遠山 野 百合	聖路加国際大学・博士 課程前期	LESHABA RI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視 察、プレゼンテーション	タンザニア
10	日間	長松 康 子	聖路加国際大学・准教 授	LESHABA RI/Seba Ida	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	大学訪問と交流、病院視 察、プレゼンテーション	タンザニア

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

8. 平成28年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	タンザニア	インドネシア	ケニア	ケニア	合計
日本	1		()	1/4 (0/0)	()	()	1/4 (0/0)
	2		17/153 (0/0)	()	2/16 (0/0)	2/16 ()	19/169 (0/0)
	3		1/9 (0/0)	()	()	()	1/9 (0/0)
	4		1/8 (0/0)	5/19 ()	()	()	8/39 (0/0)
	計		19/170 (0/0)	6/23 (0/0)	2/16 (0/0)	2/16 (0/0)	29/221 (0/0)
タンザニア	1	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	2	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	3	0/0 (1/16)	()	()	()	()	0/0 (1/16)
	4	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	計	0/0 (1/16)	()	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/16)
インドネシア	1	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	2	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	3	2/24 (0/0)	()	()	()	()	2/24 (0/0)
	4	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	計	2/24 (0/0)	0/0 (0/0)	()	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/24 (0/0)
	1	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	2	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	3	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	4	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	1	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	2	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	3	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	4	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
合計	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/4 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/4 (0/0)
	2	0/0 (0/0)	17/153 (0/0)	0/0 (0/0)	2/16 (0/0)	2/16 (0/0)	19/169 (0/0)
	3	2/24 (1/16)	1/9 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	3/33 (1/16)
	4	0/0 (0/0)	1/8 (0/0)	5/19 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	8/39 (0/0)
	計	2/24 (1/16)	18/170 (0/0)	6/23 (0/0)	2/16 (0/0)	2/16 (0/0)	31/245 (1/16)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1		2		3		4		合計	
0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)

9. 平成28年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	704,868	
	外国旅費	3,559,477	
	謝金	252,938	
	備品・消耗品 購入費	273,531	
	その他の経費	1,024,951	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	392,273	
	計	6,208,038	
業務委託手数料		640,000	
合 計		6,848,038	

10. 平成28年度相手国マッチングファンド使用額

該当なし